

巻頭言

インパクトファクターあれこれ

鈴木道雄 日本精神神経学会理事
Michio Suzuki

Psychiatry and Clinical Neurosciences (PCN) が2008年に本学会の英文機関誌となって以来、そのインパクトファクター (IF) は上昇を続けており、2007年に1.101であったものが、その後1.394, 1.326, 1.559と推移し、2011年には2.133まで飛躍的に上昇した。これまでPCNの編集や査読に尽力されてきた方々の、努力の賜物である。

大学の教授選考における業績評価などに乱用(?)されているとして悪名高いIFだが、なじみのない読者も少なくないと思われるので、簡単に説明しておく。IFは、それぞれの学術雑誌の掲載論文が、全体としてどの程度引用されたかを示す指標であり、2011年のIFであれば、過去2年間(すなわち2009年と2010年)におけるその雑誌の掲載論文が2011年に引用された回数を、2009年と2010年の合計論文数で除して求められる。IFは学術雑誌の研究に対する影響力(インパクト)の1つの指標と言えるので、掲載論文の質を直接反映するものではないにしても、雑誌の格付けに用いることは可能である。しかし、それはあくまで背景が共通の、同じ分野の雑誌における話であり、異分野の雑誌のIFを比較することには意味がない。研究者や研究機関の評価に用いる際にも注意が必要である。同じ雑誌に掲載されていても、個々の論文の被引用回数はさまざまである。IF自体が年によって変動するので、古い論文を新しいIFで評価することはできない。しかしながら、実際には公表論文の新旧に関わらず、その掲載誌の最新のIFを合計して、研究者個人の業績が評価される場合が少なくないと思われる。

どこに掲載されていようと良い論文は良い論文であるから、研究者の立場としては、IFの上下などに一喜一憂したくないところである。しかし、編集者の立場としては、学術雑誌としての地位向上のために、IFを上昇させることはわかりやすい目標である。IFの高い雑誌には質の高い論文

が投稿されやすく、またIFの高い雑誌の掲載論文は引用されやすい。IFの上昇により被引用が増加し、さらにIFが上昇して良い論文の投稿が増える、という好循環を作り出すことができる。PCNの2.133という値は、精神医学分野129誌の中で70番目に位置している。2011年の精神医学分野におけるトップはMolecular Psychiatryの13.668であり、それにAmerican Journal of Psychiatry (AJP)の12.539, Archives of General Psychiatry (AGP)の12.016が続いており、これら3誌のIFは群を抜いている。日本の精神科基幹学会の英文機関誌としてPCNが目指すところは、AJP, AGP, British Journal of Psychiatry (IF 6.619), Acta Psychiatrica Scandinavica (4.220), European Archives of Psychiatry and Clinical Neuroscience (3.494)などのように、その地域を代表する総合精神医学雑誌としての地位の確立であろうし、アジアを代表する雑誌として成長することが重要と考えられる。IFの観点からは、やや不遜かもしれないが、Canadian Journal of Psychiatry (2.417) や Australian and New Zealand Journal of Psychiatry (2.929) の背中が見えてきたというところであろうか。

2012年のPCNの投稿論文採択率は24%である。海外からの投稿は6割を超える。しかし、質が高いとはお世辞にも言えないような論文の投稿も少なくない。自然に良い論文が集まる雑誌として安定した評価を得るために、PCN編集部はいろいろな分析や対策を行っているが、学会員諸氏には、PCNを応援する気持ちを持って、質の高い論文を投稿し、また査読にご協力下さることを改めてお願いしたい。IFはトムソン・ロイター社によって毎年夏に発表されるので、本稿を執筆中の現在、2012年のIF公表が間近であり、気になるところである。